

面白さから嗜虐性へ —いじめの基層における変化と対策—

占部慎一（研究委員会委員長）

いじめの動機を基層で支える行動原理は、時代によって変化して来た。1975～1985年のいじめでは番長支配下のヘゲモニックマスキュリティが行動原理になっていたが、1990～2000年のいじめでは欧米の個人主義的文化や職業のさらなる浸透によって、私事化・自己中心主義が進み青年文化も変わったことから面白さを追及が行動原理となった。現代のいじめは面白さ追求が先鋭化し、自己愛主義とインターネット社会の持つ匿名性などが重なって公共心や道徳心を突き破り、当初から被害者が苦しんで亡くなることを予想して面白がり、自殺後も嘲笑するという嗜虐性が行動原理となっていることが事例分析から見出した。

ヘゲモニックマスキュリティ、面白さ追求、スティグマ、嗜虐性、自殺、

1. いじめの基層における変化

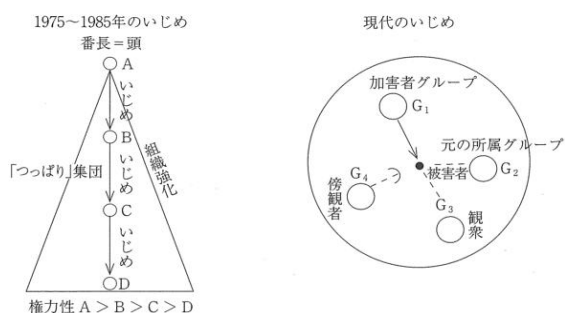
いじめ自殺事件が頻発している。若い命が失われる度に、「なんとか救うことができなかったのか」と思い悩み、教育学の研究者として、人として胸が痛む。

近年のいじめ事例を分析する度に、これまでのいじめとは違う行動原理を見出す。換言するならば、いじめを行う動機の基層部分に、人々が忌み嫌い公共心や道徳心で抑制して来た、もしくは安寧な生活を願って忘却して来た嗜虐性が露わに表出・外化しているのを見るのである。早急に対策を講じていく必要性を感じている。

2. いじめの変容

(1) ヘゲモニック・マスキュリティによる統制

1975年から1985年の校内暴力多発期のいじめは、いわゆる番長支配体制下で組織的に行われることが多かった。番長を頂点とするヘゲモニックマスキュリティ（hegemonic masculinity）による統制に違背する者や要求に応じない者がいじめの被害者になることが多かった。番長の命令を受けた組織上部の者が下部の者もしくは組織外の者を脅し暴力や恐喝などのいじめ犯罪を行った。（下左図参照 占部2002, 2007, 2014）。時が経ち、メディアによる当時のファッションの茶化し等もあり単純な構造のいじめのように思われがちであるが、若者の自殺のピークがこの時期であることを見逃してはならないだろう。



(2) 私事化⇨自己中心主義⇒面白さ追求型

その後、欧米からの個人主義の文化の導入が進むに連れ、私事化傾向（privatization tendency）が浸透し（森田 2010）、組織や支配に従うことを嫌う若者文化へと急速に変化していった。しかし、私事化は自己中心主義とも密接に結びついており自分が気に入らないと「ウザイ」「臭い」「男（女）たらし」などのスティグマ（stigma：汚名、悪名、ゴッフマン2016）を捏造して被害者に貼り付け、遊び仲間を主体とする加害者・観衆に「ケイタイ」電話で連絡を取り、暴力、恐喝、性器晒しなどのいじめを「悪ふざけ」「遊び」意識の延長で行うようになった。特に携帯電話の普及率が50%に近くなった1990年頃（総務省）からこの傾向は顕著になった。つまり、この頃からいじめは、「組織の命令を裏切ったとんでもない奴」という大義名分の基に被害者をいじめるという流れから、「いじめたら面白い」という面白さ追求型行為へと変貌したのである（左下図の右図参照）

3. 現代のいじめの特徴

現代のいじめの特徴が露わに表出しているいじめ自殺事件中、携帯電話の普及率が50%以上である時代（総務省）の事例で、残虐さや巧妙さ、被害者自殺後も平気で嘲笑していることなどの観点から以下の7件の事例を研究対象として選択した（③以降はスマートフォン普及率が50%以上の時代である）。

いじめ自殺事例

- ①1986年 中野富士見中学校 中2・・使えば、仲間装い、葬式ごっこ(教師4人参加)
- ②2007年 滝川高校 高3・・性器晒し、学校裏サイト、金銭強要
- ③2012年 大津市 中2・・集団暴行、万引き強要、射精強要写真回覧、自殺練習、葬式ごっこ
- ④2015年 取手藤代南中学校 中3・・妬み、SNSで「クソやろー、うんこ、くさや」等のスティグマ、アルバム汚し、意図的な遅刻強要、犯人でっち上げ、(教師の指導がいじめを助長した：茨城県教育委員会)
- ⑤2016年 青森浪岡中学校 中2・・妬み、SNSで「オカメ、見捨てられて当然、目が腐る、嫌なら早く死ね」等のスティグマ、金銭恐喝、暴力、万引き強要、自宅荒し、自殺練習、いじめ画像配信、いじめストレスによる起立性調節障害
- ⑥2016年 青森東北町立中学校 中1・・SNSによる人間のクズ呼ばわり
- ⑦2018年八王子 中2・・部活いじめ、転校してもSNSでいじめる

(注) 中野富士見中の事件は、携帯電話の普及率がまだ47.5%(総務省)の時代で少し古い、葬式ごっこを開き複数の教師も参加したという過去のいじめと一線を隔する新たな事件内容であったため選んだ。

(1) 嗜虐性

上記いじめ自殺事例7件の加害者の生徒たちに共通していることは、被害者が苦しんで自殺するかもしれないことを当初から思い描いていることであり、そのプロセスを楽しんでいる節が垣間見えることである。最終的に被害者が自殺しても歯牙にもかけず嘲笑している。まるで大きな野生動物が捕らえた小動物をいたぶりながら死に至らせることを楽しんでいるような嗜好、すなわち嗜虐性(atrocity 例えば、伊藤1997, 1996)を全てのケースで見えて採ることができる。資料や被害者両親の発見記録等から被害者の死を望む嗜虐性をいじめの各段階で調べてみるとターゲットを探す対象探し期で7/7件、被害者をからかってみて、同調する観衆はどれくらいいるか、被害者は抵抗しないか、また被害者や傍観者は教師や親に「チクらないか」などを観察して加害者としてのリスクを計算しいじめの遂行の可能性を探るからかい期では4/7件、この段階で嗜虐性が見られる数が少ないのは、分子に載らない他の3件の事例は、旧来の

ような暴力行為主体のいじめの傾向が強く、その片鱗が周りに知られば教師や親に告げられてしまう恐れがある。これを防ぐため、仲間に入れて一緒に遊んだり、自宅に招いたりして嗜虐性を隠蔽しているためである。それに対してSNSは匿名性が保たれ安全と思っているせいか、どの事例もたとえからかい期であっても平気で傷つくスティグマや「ウザイ。いなくなればいいのに」と死に迫りやるようなメッセージを書きこんでいる。

この後いじめ初期、いじめ中期、いじめ後期のいじめが本格化する段階では、全ての事例で嗜虐性に満ちた言動で被害者を脅したり、SNSを利用して脅しのメッセージを送ったりしている。もちろん、初期より後期の方が、露骨に存在を否定するものになっている。中でも4/7の事例では、葬式ごっこや自殺の予行練習を強要して被害者を絶望の淵に追い込んでいる。これは過去には見られない嗜虐性に満ちたいじめの形態である。この嗜虐性は、①先鋭化した面白さ追求の意識と、②偏った家庭教育から得た自己愛を肥大化させた自己愛化傾向と、③インターネットによる匿名性の世界では、自分の欲動本位のスティグマを捏造し被害者に張り付けても分からないという安易な意識の3者が結びつき嗜虐性の意識が形成され、公共心や道徳心を突き破って被害者をいじめ苦しめ死に至らせることを楽しむという非人間傾向が誕生したと推測される。

(2) SNSによるスティグマ貼り

変化の2番目はSNSによるスティグマ貼りである。上記、事例④、⑤では文字で、被害者に汚名・悪名を貼り付けている。また②では、「学校裏サイト」に被害者の全裸写真を掲載している。なぜ、いじめでSNSの拡散性やリアル性(加納 2016)を悪用したスティグマ貼りが行われるのであろうか。それは、SNSが「警察が調べない限り誰が発信しているかわからない」匿名性の世界であるからである。では、なぜ匿名性の世界では、人はスティグマを捏造し汚名・悪名に陥れることができるのだろうか。G.H.ミードは、自己(Self)は主観的な自我である主我(I)と客観的な自我である(me)から形成されていると主張している(G.H.ミード 1973)。彼の主張に従えば、通常我々は、客観的状况を気にする客我meに囲まれて主我Iを働かせ行動しているのである。よって大きく公共性や社会性に反する言動を行うことはない。しかし、匿名性の世界では、何を言っても誰だか分からな

いし社会的責任を問われな
いと思込込で
いるのである。よ
って、客我（me）
を働かせず自分
の欲動のまま主
我（I）による言
動を行うことが
できるのである。
これがいじめの
スティグマ貼
りに SNS が使
用される主理由
である。

なお、いじめ自殺事件の嗜虐性については、高校生、大学生に取ったアンケート結果を発表時に傍証データとして示す予定である。